台大日本語文研究第 35 期
2018 年 6 月，頁 171-195
2018-03-25 收稿，2018-05-04 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.201806_(35).0007

近代彦部家的家史編纂事業

龜田俊和*

摘要

彦部氏家族是代代輔助著侍奉日本南北朝期將軍足利尊氏，於室町幕府初期在政治與軍事上十分活躍的足利氏家族執事的高師直一族的旁系家族。做為室町幕府與鎌倉府（室町幕府的東國統治機構）的奉公眾甚至比高氏一族的直系還要活躍，其後代子孫現在也依然健在。

彦部家從江戶幕府末期便開始家史之編纂事業。而其過程，可以推想如下。一開始至少委託兩位學者來進行。而結果為①對於擔任室町幕府奉公眾之彦部氏，有十分詳細記載的譜系、②將紀錄重點放在身為鎌倉府奉公眾的彦部氏的譜系，一共編寫了以上兩種家史。

明治 18 年(1885)，修史館(東京大學史料編纂所的前身)的調查員訪問了彦部家，並寫下了以下的家史。①是『彦部家譜』，②則取名為『彦部系譜』，其抄寫本現在則保存於編纂所。

修史館的調查結束之後，彦部家依然繼續家史編寫事業，對①與②進行了修改。①後來取名為『天賓』，②則取名為『高階姓彦部家系譜』。

接著在明治時到大正期間，當時的彦部家的一家之主駒雄委託前原寬二進行家史的編寫。前原從數本內容有異的記載中進行內容上的取捨，從結果來說以①的『天賓』做為基礎，完成了彦部家家史的正式版本。這就是現在彦部家的傳家寶『高階朝臣家譜』。

這部家史在 1970 年代以後提供研究，照片版現存於群馬縣立文書館。

* 臺灣大學日本語文學系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

比較與對照這些家史，會發現在記載內容上都傾向於強調與京都的足利將軍家的關係。例如這些家史中「創造」了建武 3 年(1336)的攝津國湊川的戰役中因追隨足利尊氏而戰死的彥部光高、還有對侍奉於足利義滿、義教身邊的彥部忠春形象的大幅潤色、以及戰國時代的從京都返鄉的彥部信勝等人的「故事」。

在現在將南朝視為天皇家的正統、將與南朝敵對的足利氏視為叛徒而極度貶低的看法越來越來普遍的近代來說，編寫對足利家充滿善意史觀的家史，在近代的地方名門歷史考察上十分耐人尋味。

關鍵字：彥部氏、足利将軍家、家史編纂、修史館、『高階朝臣家譜』

臺灣大學學術期刊資料庫

The *Hikobe* family's works of compilation about their family history in modern period

Toshitaka Kameda *

Abstract

The *Hikobe* family is a branch family of the *Kou* family (family as stewards to Shoguns in *Nanbokucho* period). They were a member of Houkoushu (army under direct control of *Muromachi* Shoguns and *Kamakurahu*) in *Muromachi* Period and they were more prosperous than the *Kou* family. Descendants of the *Hikobe* family are alive now.

The *Hikobe* family began works of compilation about their family history in the last years of *Edo* period. I presume this process as below. At first, The *Hikobe* family requested this compilation to two scholars; therefore, two types of their family histories were compiled. One focused a branch family of The *Hikobe* family who were members of *Houkoushu* in *Muromachi* Shogunate (this book called *Hikobe-Kahu*), and another focused another branch family who were members of *Houkoushu* in *Kamakurahu* (this book called *Hikobe-Keihu*).

In 1885, investigators of *Shushikan* (forerunner of Historiographical Institute the University of Tokyo) visited this family, and copied these family histories.

After this investigation, The *Hikobe* family still continued and added their two types of family histories. They called one type *Tenhin*, and called another *Takashinaseihikobeke-Keihu*.

About in *Taisho* period (or in the last years of *Meiji* period), *Hikobe Komao* (who was the family head at this time) requested more compilation to *Maehara Kanji*. He selected plural versions of the *Hikobe*

* Assistant Professor,Department of Japanese Language and Literature,National Taiwan University

臺灣大學學術期刊資料庫

family's histories, and completed their compilation which is based on *Tenhin*, now called it *Takashinaason-Kahu* and treated it as the *Hikobe* family's treasure. These compilations were investigated again after 1970's, and saved their photographs in Gunma prefectural archive.

By comparing these compilations, a fact will become clear that the *Hikobe* family select their historical records which emphasize their connection to *Muromachi* Shoguns in Kyoto. For example, according to their family history, *Hikobe Mitsutaka* followed *Ashikaga Takauji* and was killed in the war of *Minatogawa* in 1336, but now it can be guessed that his existence was created. Another example is *Hikobe Tadaharu* and *Noriharu*, they were close advisers of *Ashikaga Yoshimitsu* and *Yoshinori* acoording to their family history, but now it can be guessed that their activity was dramatized. And another example is *Hikobe Nobukatsu*, he moved from Kyoto to Gunma in *Sengoku* period, but now it can be also guessed that the episode of his move from Kyoto was created.

In modern age, Japanese people treated *Nancho* dynasty as legitimacy, and blamed *Muromachi* Shoguns because they were opposed to *Nancho* dynasty. Therefore the *Hikobe* family's compilation of their family history which is favorable to *Muromachi* Shoguns is interesting, when we investigate historical recognition of local distinguished family in modern Japan.

Keywords: The *Hikobe* family, *Ashikaga* Family (Muromachi Shoguns), Compilation of family history, *Shushikan*, *Takashinaason-Kahu*

臺灣大學學術期刊資料庫

近代彦部家の家史編纂事業

亀田俊和*

要旨

彦部氏は、足利氏の執事を代々務め、南北朝期に将軍足利尊氏を補佐して初期室町幕府の政治や軍事に大活躍した高師直一族の庶流である。室町時代には、室町幕府や鎌倉府（室町幕府の東国統治機関）の奉公衆として高一族嫡流をしのぐ活躍を見せ、現代もその末裔らが健在である。

彦部家では、幕末から家史編纂事業が開始された。その過程は、以下のように推定できる。当初、少なくとも二人の学者に編纂が依頼された。その結果、①室町幕府奉公衆を務めた彦部氏の記述が充実した系譜と、②鎌倉府奉公衆の彦部氏に重点が置かれた系譜という、二種類の家史が編纂された。

明治 18 年（1885）に修史館（東京大学史料編纂所の前身）の調査員が彦部家を訪問し、これらの家史を書写した。①が『彦部家譜』、②が『彦部系譜』と名づけられ、謄写本が現在も編纂所に保管されている。

彦部家では、修史館の調査終了後も家史編纂事業が続けられ、①と②に加筆修正が施された。①が『天賓』、②が『高階姓彦部家系譜』と名づけられた。

さらにその後明治末から大正頃に、当時の彦部家当主駒雄が前原寛二に家史の編纂を依頼した。前原は、彦部家に伝わる複数の異なる所伝を取捨選択し、結果的に①の『天賓』をベースに彦部家の家史の決定版を完成させた。それが現在、彦部家で家宝とされる『高階朝臣家譜』である。1970 年代以降、彦部家は群馬県立文書館にこれらの家史を提供した。現在、それらの写真版が同館に収められて

* 台湾大学日本語文学系助理教授

臺灣大學學術期刊資料庫

いる。

これらの家史を比較・照合すると、京都の足利将軍家との密接な関係を強調する所伝が選ばれる傾向があったことが見えてくる。それは、建武３年（1336）の摂津国湊川の戦いで足利尊氏に従って戦死したとされる彦部光高の「創造」、足利義満や義教の近臣を務めたとされる彦部忠春―教春父子に対する大幅な潤色、戦国期の彦部信勝が京都から下向したとする「物語」などである。

南朝を天皇家の正統と見なし、南朝と敵対した足利氏を逆賊として極度に貶める風潮が強化されていた近代において、足利氏に好意的な歴史観を持つ家史が編纂されたことは、近代の地方の名家の歴史認識を考察する上で大変興味深い。

キーワード：彦部氏、足利将軍家、家史編纂、修史館、『高階朝臣家譜』

臺灣大學學術期刊資料庫

近代彦部家の家史編纂事業

亀田俊和

一、はじめに

彦部家は、足利氏の執事を代々務め、南北朝期に将軍足利尊氏を補佐して初期室町幕府の政治や軍事に大活躍した高師直一族の庶流である[1]。鎌倉時代に登場した彦部光朝を祖とする。室町時代には幕府や鎌倉府（室町幕府の東国統治機関）の奉公衆として、高一族嫡流をしのぐ活躍を見せた。

江戸時代には現群馬県桐生市広沢町に土着して帰農し、農業・織物業を営む名主となった。明治時代以降も桐生地方の織物業や政界に多大な貢献を果たし、現在もその末裔らが健在である。広沢に現存する彦部家住宅は、日本の国指定重要文化財である。中世の城館跡に近世の農民住宅や近代の織物工場が建設された、長大な歴史が凝縮されたユニークな史跡である。

彦部家には、近世末期から編纂された系図が数点伝来する。これらの家史を基に、中世の彦部氏に関する論考が数点公表されている[2]。筆者も、室町～戦国期の同氏について検討したことがある（以下、本文でこの論文に言及する場合、「前稿」と称する）[3]。

しかし、その編纂過程に関する研究はまったくと言っていいほど存在しない。管見の限りでは、わずかに菱沼一憲の検討があるのみであるが[4]、加えるべき知見は多い。

彦部家の家史の編纂過程を解明することは、単に実証的な研究を

---

1 高師直や高一族については、拙著『高 師直—室町新秩序の創造者—』（吉川弘文館、2015 年）、同『高一族と南北朝内乱—室町幕府創造の立役者—』（戎光祥出版、2016 年）、同『観応の擾乱—室町幕府を二つに裂いた足利尊氏・直義兄弟の戦い—』（中央公論新社、2017 年）などを参照されたい。

2 新行紀一「十五世紀三河の守護と国人」（『年報中世史研究』4、1979 年）、同「守護と奉公衆」（『新編 岡崎市史 中世』、1989 年）326～331 頁、奥富敬之「彦部家の歴史（古代・中世）」（彦部家編『彦部家の歴史 改訂版』（群馬出版センター、2013 年、初版 1995 年）。

3 拙稿「室町～戦国期の彦部氏」（『十六世紀論叢』8、2017 年）。

4 菱沼「西の彦部と東の彦部」（『武尊通信』120、2009 年）

臺灣大學學術期刊資料庫

深化させるだけではなく、中世の武士の歴史が近代にいかに受容されたかという歴史認識の観点からもきわめて重要であると考える。

本稿では、江戸時代末期以降に編纂され、明治 18 年（1885）から翌 19 年にかけて修史館（東京大学史料編纂所の前身）が書写した彦部家の諸系図と、その後同家が編纂事業を継続して作成した諸系図を比較・対照することによって、以上の問題を考察したい。

二、彦部家諸系図の系統関係

（一）修史館調査以前の彦部家の家史編纂事業

東京大学史料編纂所は、現在彦部家関連系図を三点所蔵している。『高階姓彦部氏系図』『彦部家譜』『彦部系譜』である[5]。

これらの系図は、いつ頃作成されたのであろうか。この問題については前稿でも検討したが[6]、本稿の趣旨からして重要な問題であり、さらに前稿発表後に加えた新たな知見も多いので、改めて論じたい。

まず、『高階姓彦部氏系図』は、近世桐生彦部家の九代当主信有の項で終わっている。信有が天保 3 年（1832）閏 11 月 11 日に死去したことが明記されているので、早くとも信有の死後に本系図の編纂事業が開始されたことは確実である。そして、本系図に記されていない次代の彦部知行が慶応 4 年（1868）8 月 29 日に死去したことが他の彦部家系図から判明するので、『高階姓彦部氏系図』はこの間に作成されたと推定できる。

彦部知行は、優れた文化人であった。彼は遠州流の花道などに通じ、『広沢古事談』の著作があり、近隣の漢学者高木耕水を招いて彦部家住宅内に「松広舎」なる学校を開き、地域の子どもたちに教育を施した[7]。そのような経歴を踏まえても、知行が豊富な知識と教養を基盤に、自家の歴史の編纂事業に熱心に取り組んだのは首肯し得

---

5 それぞれ、東京大学史料編纂所所蔵写本 4075—20、同謄写本 2075—715、同謄写本 2075—745。

6 註 3 所掲拙稿 14～17 頁。

7 以上、堀越靖久「彦部家の歴史（近世・近代）」（註 2 所掲『彦部家の歴史』254～257 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

るであろう。

『高階姓彦部氏系図』は、非常に簡略な内容である。作成当時の時点でも、彦部家家史の決定版とは見なされておらず、以下の諸系図を作成するための草稿と位置づけられていたと考えられる。

『彦部家譜』は、天武天皇から戦国期の彦部晴直・輝信兄弟に至るまでの彦部氏系図である。平安～戦国期の彦部氏に関する情報が最もまとまった基本史料である。

『彦部系譜』も『彦部家譜』と同様、中世末期に至るまでの同氏の系図であるが、鎌倉府奉公衆を務めた彦部氏庶流秀通（嫡流の光春（後述）の弟とされる）の系統に関する記述が充実しているのが特徴である。

『彦部家譜』『彦部系譜』は、いずれも『高階姓彦部氏系図』よりも内容的にはるかに豊富であり、両系図の編纂開始が『高階姓彦部氏系図』よりも後であったことを推察させる。

謄写本の末尾に付された注記によると、まず明治 19 年（1886）2 月に藤井鑢と山縣順が『彦部系譜』を書写・校正し、7 月に三級写学生遠山景生が『彦部家譜』を書写し、掌記滝沢規道が校正した。彦部家は、知行の孫信之が一二代目の当主を務めていた時期であった。

佐藤雄基によると、前年の明治 18 年（1885）7 月から 10 月にかけて修史館による第一回史料採訪が行われ、重野安繹を担当編修官として、神奈川・埼玉・群馬・千葉・茨城・栃木各県の史料調査が行われた[8]。このときの調査結果に基づいて、翌年『彦部家譜』『彦部系譜』の謄写本が作成されたと考えられる。『高階姓彦部氏系図』の採集時期は不明であるが、おそらくこれも明治 18 年に調査され、翌年に写本が作成されたと思われる。

その他、『彦部由緒書』という記録もある[9]。これは、宝暦 13 年（1763）

[8] 佐藤雄基「明治期の史料採訪と古文書学の成立」（松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』山川出版社、2015 年）35～36 頁。
[9] 東京大学史料編纂所所蔵謄写本 2075—716。

臺灣大學學術期刊資料庫

8 月に桐生彦部家七代昌信（数馬）が領主鳥居権介へ提出した上申書で、彦部家の歴史について説明したものである。これは明治 19 年 7 月に三級写学生斎藤宏が書写し、滝沢が校正した注記がある。

ほかに、昌信の上申書としては『彦部先祖書』もある[10]。これも同年 7 月に三級写学生島田真次郎が書写し、滝沢が校正した。内容的には、戦国期以降の彦部家の歴史に限られている。

以上の検討をまとめると、まず彦部知行が天保 3 年閏 11 月 11 日から慶応 4 年 8 月 29 日までの間に『高階姓彦部氏系図』を編纂した。続いて彦部家は明治 18 年までに、『高階姓彦部氏系図』よりも豊富な内容である『彦部家譜』『彦部系譜』の編纂を相次いで開始した。両系図を作成する際に、18 世紀中頃に彦部昌信が作成し、領主へ提出した『彦部由緒書』『彦部先祖書』などが参照されたことは言うまでもない。

（二）修史館調査後の彦部家の家史編纂事業

彦部家の家史編纂事業は、明治 18 年における修史館調査員の来訪で終わったわけではない。同家の事業が本格化するのは、むしろこの後である。

おそらく 1970 年代以降と思われるが、『群馬県史』編纂にあたり、彦部家の史料調査が行われた。その際に撮影された写真が、現在群馬県立文書館に収められている[11]。これらの諸史料は、前節で見た編纂所所蔵史料といかなる対応関係にあるのだろうか。

まず、群馬県立文書館は『天賓』と呼ばれる系図を所蔵する[12]。これは編纂所の『彦部家譜』と体裁も内容も共通点が非常に多く、また筆跡も同じである。よって、『天賓』と『彦部家譜』は同一であると考えられる。

ただし『天賓』は、『彦部家譜』に異筆で大幅に加筆したり修正したりしたと思われる箇所も多い。また、『彦部家譜』が戦国期の晴直・

[10] 東京大学史料編纂所所蔵謄写本 2075―746。
[11] 注 4 所掲菱沼論文 1 頁。
[12] 群馬県立文書館所蔵写真帳 H2-8 中世76／27。

臺灣大學學術期刊資料庫

輝信兄弟で終わっているのに対し、『天賓』は江戸時代桐生彦部五代信次の項まで記されている。つまり、修史館の調査終了後、彦部家は『彦部家譜』に加筆修正を加え、それを『天賓』と名づけたと推定できるのである。

同じく文書館所蔵の『高階姓彦部家系譜』と呼ばれる系図は[13]、編纂所の『彦部系譜』とほぼ同じである。しかし、これも次章で論じるように、かなり大胆に改変された部分がある。

また文書館には、『高階朝臣彦部氏系図』という系図もある[14]。これは、体裁は編纂所の『高階姓彦部氏系図』に最も近い。ただし、『高階姓彦部氏系図』がごく簡略な草稿であったのに対し、『高階朝臣彦部氏系図』の記述は充実している。また、『高階姓彦部氏系図』が彦部九代信有で終わっているのに対し、『高階朝臣彦部氏系図』は彦部駒雄（一四代当主。信有の玄孫）のあたりまで記載されている。『高階姓彦部氏系図』をベースに、新たに作成されたのではないかと考える。

次に前節で言及した、江戸時代に彦部昌信が作成し、現在編纂所が謄写本を所蔵する『彦部由緒書』『彦部先祖書』の伝来状況を検討しよう。

まず『彦部由緒書』は、群馬県立文書館所蔵の『由緒書　扣〈宝暦十三癸未年八月御屋敷江差出候節〉』[15]と同じものである。文書館には、他に『由緒書』があるが[16]、修史館はこれを書写しなかった模様である。同じく文書館の『由緒書　秘録』は[17]、以上二つの由緒書の記述を合体させた内容となっており、おそらく近代に作成されたと考えられる。ただし、桐生彦部五代信次の途中で中絶しており、続きは散逸したらしい。

なお、編纂所所蔵の『彦部先祖書』は群馬県立文書館には見あた

[13] 群馬県立文書館所蔵写真帳 H2-8 中世 76／33。
[14] 群馬県立文書館所蔵写真帳 H2-8 中世 77／42。
[15] 群馬県立文書館所蔵写真帳 H2-8 中世 75／23。
[16] 群馬県立文書館所蔵写真帳 H2-8 中世 77／36。
[17] 群馬県立文書館所蔵写真帳 H2-8 中世 75／22。

臺灣大學學術期刊資料庫

らず、この理由は不明である。その他、『家譜　書写』と題された写真帳もあり[18]、これは由緒書や古文書の断簡を集めたものである。

看過できないのは、『高階朝臣家譜』である[19]。明治末から大正頃に、当時の彦部家当主駒雄が前原寛二(臣カ)に依頼して作成した系図と推定されている。前原は、同家近隣の賀茂神社宮司を務めていた郷土史家である[20]。同家では、現在この記録が「家宝」として非常に重視され、大切に保管されている。確かに、彦部家伝来の諸系図の中で最も充実した内容である。

『高階朝臣家譜』は、体裁と内容は『天賓』に最も近いが、次章で検討するように記述が異なる箇所もある。すなわち、この系図は『天賓』をベースとして、それまでに作成された複数の系図を集大成して作成されたと推定できる。ここまで検討した結論を、表としてまとめた（【付録】）。

本節の最後に、彦部家伝来以外の同家の系図を瞥見したい。『尊卑分脈』『群書類従　第五輯』『系図纂要』『続群書類従　第七輯上』などに掲載される高階氏の系図にも、彦部氏は記載されている。

これらの諸系図は、比較的信頼性の高い史料として、古くから日本史研究において活用されてきた。次章第一節で検討するように、彦部家も家史編纂に際して、これらを参照した形跡がある。よって中世の彦部氏を研究する際には、これらの系図類にも目配りする必要があると考える。

『尊卑分脈』は、南北朝期の北朝の公卿洞院公定が編纂した諸氏家系図で、室町期を通じて増補・改訂が行われた。『群書類従』は、江戸時代後期の盲目の国学者塙保己一が文政２年（1819）に完成させた、江戸時代以前の国書を編纂し刊行した叢書である。『系図纂要』は、国学者飯田忠彦が江戸時代末期に編纂したとされる諸氏家系図である。『続群書類従』は、『群書類従』の続編で、大正 13 年（1924）

[18] 群馬県立文書館所蔵写真帳 H2-8 中世 76／31。
[19] 群馬県立文書館所蔵写真帳 H2-8 中世 75／26。
[20] 以上、彦部家現当主篤夫氏の御教示による。

臺灣大學學術期刊資料庫

から昭和５年（1930）にかけて続群書類従完成会によって刊行された。

なお、高一族庶流の南宗継が開基となった同氏の菩提寺で、栃木県足利市名草中町に現存する清源寺がかつて所蔵していた『清源寺本高階系図』は比較的信頼度が高いとされるが[21]、これに記載される南北朝期の彦部氏の系譜は、今までに列挙した諸系図とは大幅に相違する。この理由については、別の機会に論じたい。なお、彦部家には古文書も伝来する[22]。

三、彦部家家史に見る「史実」の変容過程

（一）彦部光高の「創造」

前章で解明したように、彦部家の家史編纂時事業は近世末期の彦部知行の代に始まり、大正初期の彦部駒雄の代まで継続した。その間、明治 18 年に修史館が調査を行ったことにより、編纂の途中経過が編纂所に写本として残されることとなった。そのため、家史編纂に際しての同家の「歴史認識」の変容が窺えるのである。

系図相互の異同箇所は膨大な数にのぼるが、本稿では大きな論点三点にしぼって検討したい。まず取りあげるのは、南北朝期の彦部氏の系譜である。

彦部氏初代の光朝から光春まで、諸系図の嫡流部分を適宜省略しながら掲げたい[23]。大別して二つの系統に分類できる。

Ａ系統（秀光を光春の父とする系図）

【彦部系譜】

光朝┬光継―秀貞―秀光―光春
　　└行貞

[21] 峰岸純夫『足利尊氏と直義―京の夢、鎌倉の夢―』（吉川弘文館、2009 年）179～190 頁に系図の全文が翻刻されている。南宗継については、註 1 所掲『高一族と南北朝内乱』126～137 頁を参照されたい。

[22] 東京大学史料編纂所所蔵影写本 3071・33―17 および同所所蔵写真帳 6171・33―18。影写本と写真帳は、必ずしも一致しないので注意が必要である。また、一部が『群馬県史　資料編 6　中世 2』『群馬県史　資料編 7　中世 3』に収録されている。

[23] なお『高階姓彦部氏系図』は、率直に言って系図の体を成していない。

臺灣大學學術期刊資料庫

【高階姓彦部家系譜】

光朝┬光継―秀定―秀光―光春
　　└行貞

【尊卑分脈】【続群書類従】

光朝┬光継―秀定―秀光―光春
　　└行貞

B系統（秀光を光春の父としない系図）

【彦部家譜】

光朝┬光継―秀貞（光貞イ）┬光　春
　　└行貞　　　　　└秀光

【天賓】

光朝―光継┬秀貞＝光高―七郎┬光春
　　└光高　　　　└秀光

【高階朝臣彦部氏系図】

光朝┬光継―秀貞―光高―光春
　　└行貞

【高階朝臣家譜】

光朝┬光継┬秀貞＝光高┬光春
　　└行貞└光高　　└秀光

【群書類従】【系図纂要】

光朝┬光継―秀定―光春
　　└行貞

大きな異同は大別して二点ある。第一に、秀光を光春の父とするかしないかである。父とする系図（A系統）は『彦部系譜』『高階姓彦部家系譜』『尊卑分脈』『続群書類従』、しない系図（B系統）は『彦部家譜』『天賓』『高階朝臣彦部氏系図』『高階朝臣家譜』『系図纂要』『群書類従』である。

推察するに、これは家史編纂に際して、『彦部系譜』が『尊卑分脈』

臺灣大學學術期刊資料庫

[24]、『彦部家譜』が『群書類従』もしくは『系図纂要』を参考にしたことに起因するのではないか。

ただし『彦部家譜』は、『群書類従』『系図纂要』には登場しない秀光を、光春の弟とする。彦部秀光は、貞治 6 年（1367）3 月 13 日二代将軍足利義詮に供奉した人物である[25]。一方彦部光春は、これに先立つ観応の擾乱（1350 年）頃に登場する[26]。

『彦部家譜』作成の際、編纂者は『彦部系譜』等が光春の父とする秀光が、光春よりも後年代に活躍するのは不自然であると考えて、秀光を光春の弟と判断したのではないだろうか。そして、この見解が彦部家に採用されて、家宝の『高階朝臣家譜』に記載されたと考えられるのである。

第二に、彦部光高なる人物の存在である。この人物は、近世末期の『彦部家譜』『彦部系譜』『高階姓彦部氏系図』いずれにも存在しない。

ところが近代の『天賓』に、突如光高―七郎父子が登場する。同系図は、光高は秀貞の弟だったのが、建武 3 年（1336）5 月の摂津国湊川の戦いで戦死した功によって家を継いだとする。

前章で述べたように、『天賓』は『彦部家譜』に加筆した系図であり、この部分もあきらかに修史館による調査後の加筆である。ただし、七郎は一度別の名前を書いた後に墨で消して訂正されており、戦死も七郎の事蹟とも読めるなど、所伝が固まりきっていない形跡も窺える。

それが『高階朝臣彦部氏系図』になると、七郎が消滅して光高のみとなり、湊川戦死の所伝が確立した模様である。そして、その説が『高階朝臣家譜』に継承されるのである。

しかし、宝暦 13 年（1763）8 月の『彦部由緒書』では、湊川の戦いで戦死したのは光春の父七郎光貞とされている。『彦部家譜』の光

[24] ただし、江戸末期の『彦部系譜』が大正～昭和期の『続群書類従』を参照したことはあり得ない。
[25] 『太平記』巻第四〇「中殿御会事」。
[26] 観応 2 年（1351）12 月 18 日付足利直義軍勢催促状（彦部文書）。

臺灣大學學術期刊資料庫

春の父秀貞の項に、「光貞イ」と注記が付されているのは、その所伝を反映させたものであろう。

さらに『由緒書』『由緒書　秘録』では、戦死したのは七郎光信という名である。ちなみに両書には、「元弘 3 年（1333）足利尊氏が六波羅探題を攻撃したとき、彦部光信は大高重成（高一族庶流の有力武将）と先陣を務めた。河野・陶山の敵陣を打ち破り、その軍功が絶大であったにもかかわらず、執事高師直が重成と不和となったため高一族の義を忘却して光信の恩賞を申し掠めた」との記述がある。

高師直は、『太平記』の記述などから、日本史上の大悪人として古くから著名な人物である。つまりこの所伝からは、高一族庶流の彦部氏にさえ『太平記』以来の師直悪玉史観が浸透している様相が窺えるのであり、大変興味深い。

由緒書の所伝の由来も問題であるが、少なくとも彦部光高が近代に入って新たに「創作」された人物であることは間違いない。湊川の戦いとは、彦部氏の主君足利尊氏が名将楠木正成を撃破し、室町幕府樹立の大きな契機となった日本史上著名な合戦である。その合戦で名誉ある戦死を遂げたとする所伝を加えることによって、祖先を顕彰する意図を近代の彦部家が持っていたと考えられるのである。

なお、『天賓』で光高の子とされる七郎が、以降の系図から消滅したのはなぜであろうか。彦部七郎は、貞和 4 年（1348）正月 5 日の河内国四条畷の戦いの後、河内・和泉守護高師泰の配下の武士として河内国に在陣し、妙心寺領下仁和寺荘を侵略した人物である[27]。また、観応 2 年（1351）2 月 26 日に高師直一族が摂津国武庫川辺で誅殺された際、小林掃部助に殺害されたことが『太平記』に記されている[28]。

近代の家史編纂者は、下仁和寺荘の事件や『太平記』の所伝を知り[29]、湊川で戦死したはずの七郎が以降も生存している矛盾に気づ

[27] 山城妙心寺文書（『大日本史料　第六編之十二』貞和 4 年（1348）11 月 10 日条・貞和 5 年（1349）4 月 17 日条）。
[28] 巻第二九「師直以下被誅事付仁義血気勇者事」。
[29] 彦部七郎の下仁和寺荘侵略事件が記載される『大日本史料　第六編之十二』

臺灣大學學術期刊資料庫

いたのではないだろうか。あるいは、荘園侵略の犯人として寺家に糾弾されるのは不名誉なことであるし、悪人師直とともに討たれる死に様も相当惨めであることが考慮されたのかもしれない。これが、七郎が彦部家の家譜から消滅した理由であると考えられるのである[30]。

（二）彦部忠春―教春父子

『彦部家譜』（→『天賓』）『高階朝臣家譜』等によれば、彦部光春が文和 4 年（1355）5 月 16 日に死去した後、子息松法師丸が家督を継承した。ところが松法師丸は貞治 5 年（1366）7 月 10 日わずか 14 歳で死去したため、弟忠春が後を継いだ。

彦部忠春は、三代将軍足利義満の近臣として活躍したため、彦部家の家史に記載される事跡も豊富である。ひときわ目立つのは、応永 4 年（1397）4 月 16 日の北山殿立柱上棟式に際して金閣の作事奉行を務めたことであるが、これは彦部家の家史以外の史料で裏づけることはできない。永享 7 年（1435）11 月 9 日、忠春は 81 歳で死去したとされる。彦部家では、戦国期の晴直・信勝（後述）に次いで重視される人物である。

忠春の死後、嫡子教春が彦部氏を継いだ。教春は嘉慶 2 年（1388）生まれで、嘉吉元年（1441）6 月 24 日六代将軍足利義教が播磨守護赤松満祐に殺害された際、義教に殉じて赤松亭で戦死したとされる。その後、彦部氏嫡流は庶流から賢直を当主に迎え、家を存続した。

筆者は、前稿において彦部忠春についても検討を加えた[31]。その結果、忠春の事跡は彦部家以外の史料からある程度裏づけることができるものの、信頼性の高い史料である『常楽記』永徳元年（1381）正月 11 日条に 27 歳で死去した記事が見え[32]、長寿を全うしたとす

が刊行されたのは、大正 2 年（1913）3 月である。『高階朝臣家譜』を編纂した前原寛二（臣カ）が、この記事を見た可能性は十分に存在する。

30 ちなみに『清源寺本高階系図』には、光継の弟に七郎の名がある。七郎は光春流とは別系統で、彦部氏の本来の嫡流であったと筆者は推定しているが、それについては別の機会に論じたい。

31 註 3 所掲拙稿 21～24 頁。

32 『群書類従　第二九輯』。

臺灣大學學術期刊資料庫

る彦部家の記録と大幅に齟齬することを指摘した。また子息教春についても、50 歳近くで義教から偏諱を拝領したことになり、不自然である[33]。すなわち忠春―教春父子についても、彦部家の所伝をそのまま「史実」と見るのは大きな問題があるのである。

さて、今回注目するのは、同じく彦部家が編纂した『彦部系譜』である。こちらでは、松法師丸が死去した後、彦部氏嫡流は断絶したと明記されている。そして、はるか後年の文明年間（1469～87）に庶流の賢直が嫡流を継いだとする。つまり、こちらの家譜では忠春―教春父子は存在しないことになっているのである。また、『彦部系譜』を継承して完成させたと推定できる『高階姓彦部家系譜』も、若干表現は異なっているがほぼ同内容である。

何より、彦部家の諸系図に先行する『尊卑分脈』『群書類従』『系図纂要』に、忠春―教春父子の名が一切見えないことは看過できない。これらの諸系図ではすべて、彦部賢直が松法師丸の実子とされている。

彦部忠春の事跡が他の史料から一応裏づけられるので[34]、忠春不存在説も問題があることは確かである。しかし、前節で検討した彦部光高の「創作」と同様、『彦部家譜』系の家譜が、義満の近臣として大活躍した忠春、義教に殉じた忠臣教春といった潤色を施した可能性は否定できない。少なくとも忠春の長寿と教春の存在については、「創作」を疑うべきであろうと考える。

（三）彦部信勝の出自

彦部信勝は、戦国時代に京都で将軍に奉公していた彦部晴直の三男として生まれた。永禄 3 年（1560）、関白近衛前嗣に供奉して関東に下向し、上野国広沢郷の彦部師光から家を譲られ、近世桐生彦部

[33] 木下聡氏のご教示による。

[34] ただし、それらの史料に記載される彦部氏の名前は「彦部四郎左衛門尉」「彦部伊豆守」であり、「忠春」と明記されたものが皆無である点は問題である。また永和 4 年（1378）10 月 23 日付高階光春打渡状、広島大学大学院文学研究科日本史学研究室所蔵猪熊文書（『愛知県史　資料編 9　中世 2』326 号）の「光春」は忠春の初名であると先行研究では理解されているが、父と同じ名を名乗る不自然さがある。

臺灣大學學術期刊資料庫

家の初代となった。　以上の詳細は『高階朝臣家譜』に記され、現代の彦部家の「正史」となっている。

しかし、この所伝は江戸時代に誕生して近代に最終的に完成した創作であり、信勝が上野の彦部家に生まれてそのまま同家を継承した人物であることを前稿で論証した[35]。それは、編纂所所蔵の同家諸系譜の記述に基づいた立論であった。修史館の調査後、信勝の出自をめぐる問題は、彦部家でどのように変容したのであろうか。

まず『彦部家譜』では、前稿で指摘したように、京都の彦部氏は晴直・輝信（晴直弟）で断絶しており、信勝の名はない。一方、鎌倉府奉公衆を務め、戦国期に上野に在住した彦部氏の末裔信親の子が「信﹅」とされ、「彦部弥太郎」の付記がある。

弥太郎は、『高階朝臣家譜』等において、信勝の仮名とされている。のみならず、そもそも「太郎」は鎌倉府奉公衆の彦部氏に多く見られる仮名であり、実名の「信」も戦国時代の関東彦部氏で通字となりつつあった形跡がある。以上の傍証により、前稿ではこの「信﹅」を信勝に比定した。

それが『彦部家譜』を継承した『天賓』では、本来輝信の項目があった場所に、異筆で「等持院殿尊氏公幕府御開ヨリ二百三十余年／将軍家御十三世、彦部氏■■九代此時断絶」などと上書きされている。そして、頁を改めて輝信・信勝以降の系譜が記されているが、これもあきらかに異筆である。

一方、関東彦部家の「信﹅」の部分は、異筆で「師光」と上書きされ、師光の妹たちや子息が追記されている。修史館の調査後、しばらくしてから関東彦部氏出身の信勝を京都彦部氏の系譜に移す「改竄」が行われたことは確実である。

次に『高階姓彦部氏系図』における信勝は、これも前稿で述べたとおり中世までの系譜がいったん終了した上で、新たに始まる近世彦部家の初代当主という構成である。やはり、京都の彦部氏と信勝の関係は微塵も読み取れない。

[35] 註 3 所掲拙稿 29～32 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

しかし、これを継承したと推定される『高階朝臣彦部氏系図』は、信勝京都出身説を採用している。信勝周辺の系図は、『天賓』の清書と評して差し支えないほどである。

一方『彦部系譜』では、これまた前稿で触れたように、京都の彦部氏は国直の項で中絶している。作成途中に未完成のまま、修史館の書写を受けた形跡がある。関東彦部氏の方で、『彦部家譜』では信親とされる人物が信宗とされ、その子が『彦部家譜』と同様「信丶」とされ、「彦部弥太郎」の付記がある。よって、前稿ではこれも信勝を指すと考えた。

『彦部系譜』によれば、彦部「信丶」は上野国に生まれ、生涯を通じて同国に居住しており、京都から下向云々は一切記されていない。さらに父信宗に「親」「勝」の注記が付され、同記作成時における「ゆらぎ」が垣間見える。

これが同記を継承した『高階姓彦部家系譜』になると、京都彦部氏の方は国直の後に晴直・輝信等が加筆されている。そして関東彦部氏の方で、信宗が消滅し、信宗の父とされていた宗信の子息が信勝と明記される。信勝が関東彦部氏の子孫であることが、ここで確定したのである。

すなわち、明治～大正期の彦部家には、近世桐生彦部氏の祖信勝を京都出身とする所伝（『天賓』『高階朝臣彦部氏系図』）と、桐生出身とする所伝（『高階姓彦部家系譜』）が並立していたのである。

この事実は、すでに菱沼一憲が指摘している[36]。この問題について菱沼は、「京都系の光春流より、関東系の秀通流の方が妥当性が高いという迷いが、A系（筆者註：『天賓』など）の＊信親がB系（筆者註：『高階姓彦部家系譜』）では＊信勝になっていることに顕れているのかもしれない」「あるいは、そもそもA系・B系は京都・関東に分(ママ)れていながら連絡があり、戦国乱世に翻弄されつつ桐生で一つになったという考えもできようか」と述べる。

正直、筆者は菱沼の議論の意味がよくわからない。しかし、それ

[36] 註 4 所掲菱沼論文。

臺灣大學學術期刊資料庫

は菱沼がこの問題に対して、整合的な解釈をうまく導き出せなかったということなのではないだろうか。信勝が京都出身であることが確固たる「定説」として確立している状況下、彦部家が所有する同じ系図で「定説」とは異なる記述が存在することを発見した際、菱沼が相当とまどったであろうことが筆者は何となく想像できる。

だが、史料編纂所所蔵の彦部氏関連史料を手がかりにすると、異なる所伝が形成された過程が見えてくるのではないだろうか。筆者が推定しているのは、以下のような経緯である。

幕末～明治初期の彦部家は、少なくとも二名の学者に家史編纂を依頼した。彦部家家史の集大成であり、現在家宝として尊重されている『高階朝臣家譜』は、前述したように郷土史家前原寛二(臣カ)に依頼して作成されたという。平成 7 年（1995）に編纂された同家の歴史書も、奥富敬之や堀越靖久等の研究者が分担して執筆を担当している[37]。それらに鑑みると、近代初期の彦部家も近隣の歴史家に編纂を依頼したとする推定は、十分に許されるであろう。

二名の学者がそれぞれ編纂したのが、(『彦部家譜』→)『天賓』および(『彦部系譜』→)『高階朝臣彦部氏系譜』である。おそらく、前者は京都の彦部氏、後者は関東の彦部氏の歴史を中心に調査したと考えられる。そして両者とも、当初は彦部信勝関東出身説を固めつつあった。

ところが明治 18 年の修史館の調査終了後、『彦部家譜』の編纂者は、信勝京都出身説に傾き、その変更を経て『天賓』が完成した。変更部分が異筆であることから、編纂者が交代した可能性もあるだろう。

しかし『彦部系譜』の編纂者は、関東出身説への確信をいっそう深めていった。そのため、完成版の『高階朝臣彦部氏系譜』では、鎌倉府奉公衆の彦部氏末裔として、ついに信勝の名が明記されるに至ったと思われるのである。

以上が、同じ家の家史で異なる所伝が存在する理由として筆者が

[37] 註 2 所掲『彦部家の歴史』。

臺灣大學學術期刊資料庫

推定する経緯である。『天賓』『高階朝臣彦部氏系譜』の完成後、彦部家では新たな家史の編纂が開始され、家宝『高階朝臣家譜』が完成したのであるが、この家譜では信勝京都出身説が全面的に採用され、関東出身説は抹消されることとなった。

その理由を推定することは、比較的容易であろう。関東の信勝がそのまま桐生に土着して帰農するよりは、当時の日本の首都で政治・社会・文化の最先端地であった京都で足利将軍に直接仕えた後に関白に供奉して下向した方が[38]、ストーリーとしてはるかに劇的で魅力的であるためである。祖先を顕彰し、美化する意向が、家史編纂に大きく影響したのである。

四、おわりに

以上、本稿では近代彦部家の家史編纂事業を検討した。彦部家は、少なくとも二人の学者に家史の調査・編纂を依頼した。それによって完成した二つの家史から、郷土史家前原寛二(臣ヵ)の助力も得て、所伝が異なる部分を取捨選択し、現代家宝として尊重する最終決定版の『高階朝臣家譜』を完成させた。江戸時代末期から明治時代末期～大正初期にかけて、彦部家はその事業に数世代数十年の時間を費やしたのである。

その間、明治 18 年に修史館の調査員が彦部家を訪れ、その「途中経過」を記録したおかげで、そうした経緯が明瞭に浮かび上がった。本稿の研究成果は非常に興味深く、実証的にも大きな価値を有すると自負する。

注目すべきは、所伝の取捨選択において、京都の足利将軍家への忠誠や緊密な関係を強調する所伝が選ばれる傾向があったことである。

[38] ちなみに註 3 所掲拙稿 31 頁でも指摘したように、下向の契機についても、『彦部由緒書』が関白に供奉したとするのに対し、『彦部先祖書』は古河公方を監視する目付として派遣されたとし、複数の所伝が存在した形跡が窺える。近代の彦部家は関白供奉説を採用したわけであるが、これもよりドラマチックな物語を選択した結果であろう。現在、『彦部先祖書』が現存しないのも、あるいはこれと関係しているかもしれない。

臺灣大學學術期刊資料庫

そのため、結果的に『高階朝臣家譜』は、その傾向がより強い『天賚』を多く継承することとなった。それは、後者が前者の下書きであると菱沼一憲に評価されるほどであるが、彦部七郎の存在のように後者を継承しなかった所伝もあることは注意を要する。

室町幕府の奉公衆の末裔を自認する彦部家にとって、そうした操作はあまりにも当然であっただろう。しかし、彦部家の家史編纂事業が行われた明治時代が、周知のとおり近代国家日本の形成期であり、天皇中心の国作りが進められていた時期であることを想起すると、彦部家の家史編纂の方針はまた別の意味を持ってくるのではないだろうか。

この時期は南北朝正閏論争が起こるなど、南朝を天皇家の正統と見なし、その南朝と戦った足利氏を逆賊と見なして貶める歴史観が強化されていった時代である。にもかかわらず、地方の名家では、足利氏との密接な関係を持つ歴史を名誉と感じる見方も存在したのである。その見方は、後の昭和時代初期の皇国史観隆盛の時代でも変わることなく、現代の彦部家まで一貫して継承されている模様である。

さらに明治～大正期は、彦部家以外でも、全国各地の旧家で家史編纂事業が行われた時代であった。例えば、薩摩国鹿児島郡長谷場村（現鹿児島市池之端町）を由緒の地とする鎌倉時代以来の武士の家である長谷場家でも家史編纂事業が行われ、史料編纂掛（修史館の後身）と交流したことが知られる[39]。全国的に同様の傾向が見られるのも興味深い。

これらの問題も重要な検討課題となってくるであろうが、ひとまずはここで擱筆したい。

[39] 佐藤雄基「朝河貫一と入来文書の邂逅―大正期の地域と歴史をめぐる環境―」（河西英通・浪川健治編『グローバル化のなかの日本史像―「長期の一九世紀」を生きた地域―』（岩田書院、2013 年）209～213 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

【付録】彦部氏関連史料対応表

	史料編纂所所蔵	番号	群馬県立文書館所蔵	番号	備考
1			『高階朝臣家譜』	Ｈ２―８中世 75／26	現彦部家家宝２をベースに編纂
2	『彦部家譜』	謄写本 2075-715	『天賓』	同 76／27	加筆あり
3	『彦部系譜』	謄写本 2075-745	『高階姓彦部家系譜』	同 76／33	改竄あり
4	『高階姓彦部氏系図』	写本 4075-20	『高階朝臣彦部氏系図』	同 77／42	新たに作成か？
5	『彦部由緒書』	謄写本 2075-716	『由緒書扣〈宝暦十三癸未年八月御屋敷江差出候節〉』	同 75／23	
6	『彦部先祖書』	謄写本 2075-746			
7			『由緒書』	同 77／36	
8			『由緒書秘録』	同 75／22	５・７を合体か？
9			『家譜　筆写』	同 76／31	

臺灣大學學術期刊資料庫

【付記】本稿は、2017 年台大日本語文創新国際学術検討会（2017 年 12 月 9 日）において、「鎌倉～南北朝期の彦部氏―室町幕府執事高師直一族庶流の動向―」と題して発表した報告の一部を基に作成したものである。発表の際、貴重な御指摘・御教示を賜った先生方に篤く御礼申し上げます。

【参考文献】

奥富敬之（2013、初版 1995）「彦部家の歴史（古代・中世）」彦部家編『彦部家の歴史　改訂版』群馬出版センター

亀田俊和（2015）『高 師直―室町新秩序の創造者―』吉川弘文館

亀田俊和（2016）『高一族と南北朝内乱―室町幕府創造の立役者―』戎光祥出版

亀田俊和（2017）「室町～戦国期の彦部氏」『十六世紀論叢』８

亀田俊和（2017）『観応の擾乱―室町幕府を二つに裂いた足利尊氏・直義兄弟の戦い―』中央公論新社

佐藤雄基（2013）「朝河貫一と入来文書の邂逅―大正期の地域と歴史をめぐる環境―」河西英通・浪川健治編『グローバル化のなかの日本史像―「長期の一九世紀」を生きた地域―』岩田書院

佐藤雄基（2015）「明治期の史料採訪と古文書学の成立」松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』山川出版社

新行紀一（1979）「十五世紀三河の守護と国人」『年報中世史研究』4

新行紀一（1989）「守護と奉公衆」『新編　岡崎市史　中世』

菱沼一憲（2009）「西の彦部と東の彦部」『武尊通信』120

堀越靖久（2013、初版 1995）「彦部家の歴史（近世・近代）」彦部家編『彦部家の歴史　改訂版』群馬出版センター

峰岸純夫（2009）『足利尊氏と直義―京の夢、鎌倉の夢―』吉川弘文館

臺灣大學學術期刊資料庫